

委員会だより

<5月6日(日) 8名出席>

【1】財務報告：01年4月度決算報告 ()内:01年度年間予算

	00°収入累計	00°支出累計	収支差額
一般会計	2,720,211 (6,073,380)	1,594,885 (5,297,000)	1,125,326 (776,380)
建設会計	807,478 (1,876,674)	315,000 (1,817,000)	492,478 (59,674)
愛の献金	500,444 (617,864)	101,420 (320,000)	399,024 (297,864)
信徒会計	244,657 (744,520)	30,000 (510,000)	214,657 (234,520)

▶特記事項:

- ◆一般会計: ■ミサ献金: ご復活献金48,482、その他52,329 ■物置の引き戸修理5,000支出
- ◆建設会計: ■信者の方から特別献金20,000
- ◆愛の献金: ■聖堂内献金15,311 ⇒ 愛の献金にされることとした。⇒ エルサルバドルの学校建設の義援金に活用させて頂く。

【2】議事内容:

- ◆神父様の霊名のお祝い(6月29日):
 - ◆霊的花束のお願いを第1週にする。
 - ◆お祝いは別途検討。
- ◆パソコン導入に関する件:
 - ◆ノートパソコンか、デスクトップにするか? 内容は更に検討するが、購入する方向とする。
- ◆聖体奉仕者任命4氏(小野寺、竹内、阿部、小山(恭)の4氏):
 - ◆司教様からの委嘱状を山崎神父様から授与(5/6のミサ後)。
 - ◆今後、神父様に代わってご聖体を届けることが出来る。(運営に関して、しばらく様子を見る。交通費については当面「奉仕」とする)
- ◆湘南キリスト教セミナー準備委員会報告(小野寺さん):
 - ◆講演者は中田 武仁 氏(国連 国際ボランティア名誉大使)、晴佐久 昌英(神父)、シスター景山(あき子)の3名に決定。
 - ◆注: 既報であるが、
 - 開催日: 11/17,24, 12/1の3日間
 - テーマ: 愛と心の幸せを求めて
- ◆宣教司牧協議会の方の運営について:
 - ◆第5地区委員会(藤沢教会が代表)からの説明内容伝達合せて、小野寺さんが石井さん、内藤さんと相談する。
- ◆聖歌の集い:
 - ◆5月26日に山手教会にて開催する。
- ◆神父様のご出張:
 - ◆別途当番表を掲示する。
- ◆5月19日に側構工事を壮年会で行う。
- ◆中和田教会のホームページ:
 - ◆内容を早くアップデートする。
 - ◆従来、藤沢教会のホームページの下に繋がっていたが、今後中和田教会独自で開設する方向で検討を進める。



壮年会だより

<5月20日(日) 11名出席>

- ◆委員会報告(5月度)
 - ◆特別な報告事項ありません。(教会報を見て下さい)
- ◆議案
 - ◆6月の聖書朗読
 - 6/3: 七浦さん 6/24: 橋さん
- ◆自由議題
 - ◆遠足について
 - 5/26 三浦半島の武山に行きます。比較的やさしいコースです、皆さんの参加をお願いいたします。
 - ◆庭の掃除 5/19 8名参加して実施大変きれいになりました。集会室の天井の塗装が残りましたが、後日行います。
 - ◆町内会大掃除(6/3予定) マンホールの清掃実施済み、立会だけ行う。
 - ◆バザー委員会を開く時期になりました、次回委員を決めたい。
 - ◆物置の棚整理をします、お手伝いが必要なときは、協力お願いします。
 - ◆ごミサの共同祈願は、第5地区で祈りを決めて、それを各教会で祈っている。
 - ◆最近教会の雰囲気は良くなっていると感じる。



婦人会だより

<5月20日(日) 23名出席>

- ◆委員会報告
- ◆報告事項
 - (1) 遠足について
 - ◆五月晴れの5月13日(日)、19名の参加で無事に実施できました。
 - ◆ミサの後、マリア山の木陰で輪になって昼食をし、その後は十字架の道行や散策など思い思いに過ごし、普段は多忙で忘れかけている信仰と霊的な賜物にホッとできたひとときでした。
 - (2) バザー関連
 - ◆6月のバザーの仕事日は、予定どおり第1と第3木曜日の午後1時からです。毎回沢山の方が参加して下さっています。
 - ◆今後お茶菓子代として、一回につき500円を支出することが決まりました。
- ◆お知らせ事項
 - (1) 仲村フク様が退院されました。
 - (2) 石崎博美様にご出産祝いをさしあげました。
 - (3) フマニタスへの援助金を例年どおり振込みます。
 - (4) 6月17日(日)例会の後、衣類の交換会を行ないます。提供していただける方は、6月10日(日)までにお持ちください。(ダンボール箱を用意します)
 - (5) 6月28日(木)、カトリック婦人同志会のバス遠足があります。(カトリック神学院など) 参加される方は、阿部映子様までお問い合わせください。

次回例会は6月17日(日)、次回当番はC地区です。



広報 なかわだ

今月の予定

第270号

委員会	6月 3日
壮年会、婦人会	6月 17日
聖霊降臨の主日	6月 3日
三位一体の主日	6月 10日
サロン	6月 10,24日
レジオ	6月 8,15,22,29日



2001年6月号

中和田カトリック教会
広報委員会発行
泉区中田北1丁目9-1
Tel. (045) 803-6141
平成13年6月3日



思い出せたこと ②

山崎 正俊



この頃、私は糖尿(トウニョウ)にならぬように、カロリーを制限しなければならなくなった。いわゆる成人病を予防しなければという忠告を受ける年齢になったということ。好きで老人になったわけではない。人によっては差があるのでしょうか。友人のうちには、チョコレートをいくら食べても、その気配さえ見えないのが数人いるらしい。「そのうちになるさ」と思っているのはやっかみかもしれない。でも、それは、言うてはならない。

それとは関係ないことだろうが、メズラシイ事実を知らされて、おどろかされている。――

いちばん年下の子どもさんが、もう成人式を過ぎておられるはずなのに、そのお母さんの幼いときからの、その親たちからのシツケのよると、どこからのいただきものでも、いまでも6等分して、喜びを分かち合うのだそう。誰かが留守であっても、かくしごとはしないのだそう。

ときには、分け合うことが出来ないものがあるはずだろうけれど、なっとくできるような気配りをするのだという。そのような思いやりの心が、平和を、信頼のうちに保たせるもとにもなるのだろうと、私も気がつかされた。

幼いときに、自分のために、他の人よりすくなすぎると感ずると、それが、心を痛めることになり易いし、心を暗くする原因になることがある。何かのことがあると、理由のわからない不安にとりつかれる。それが、誰にもわかってもらえないで独り悩むことになる。つまらない、あまり問題にもしにくい場合には、特に内にこもる。これが、いわゆる「不幸」のはじまり。中国語に「少心少心」という言い方があったと思うのだが、私の勘違いかもしれない。「あいてのこと」を考へるということで、思いやりの浅いことを言うのかもわからない。普通ならば、そのまま通り過ぎてしまうことなのに、だから、よけいに、うっかりすることだろう。気にしはじめれば、どうにもならない。

はじめに予想していた結論にとどかなくなりそうなので、いきなり終わり。――

「思いやり深さをやしなう。それを、ふつうの生き方にする」「誤解されたとしても、それを、軽く受けながす。そのうちにどうにかなるよね」「しかたがないさ。人、それぞれだから」。

(2001.5.9)

ミサ当番表 (2001年6,7月)

月/日	主日	朗読、奉納	オルガン	月/日	主日	朗読、奉納	オルガン
6/3	聖霊降臨の主日	壮年会	岩 淵	7/1	年間第一三主日	壮年会	森 田
6/10	三位一体の主日	青年会	森 田	7/8	年間第一四主日	青年会	保 科
6/17	キリストの聖体	婦人会C地区	保 科	7/15	年間第一五主日	婦人会D地区	岩 淵
6/24	洗者聖ヨハネの誕生	壮年会	岩 淵	7/22	年間第一六主日	壮年会	森 田
				7/29	年間第一七主日	婦人会D地区	保 科

当番の方は10分前には集合して下さい。ご都合の悪い方は典礼委員(萩原氏: Tel. 802-6258)迄お申し出下さい。



大聖年の思い出（聖なる扉を潜る）

下村 毅・昭子

大聖年に開かれた「聖なる扉」を、私共夫婦が潜れる「最後のチャンス」と思い、「大聖年に開く四つの扉を潜る」ツアーで2000年11月21日に日本を飛び立った。ツアー同行司祭は大阪教区池田教会「デニス・マツゴワン神父」と申され恰幅の良い神父様だった。

ローマに着いた翌日「教皇ヨハネ・パウロ二世謁見」のため、昨日からの雨上がりの早朝バスにてサンピエトロ寺院へ向かった。寺院広場は柵に囲まれ既に椅子がびっしり並べられ、入口には警備員が配置され「金属探知機」も施設されて物々しい雰囲気だ。五年前のクリスマスに「心のともしび」（ハヤット神父様）ツアーで来た時は屋内指定席だったため、こんなことは無かった。

10時、空は「澄み切った青空」に変わり広場の椅子は満席だし、柵の外も立ち見の人々一杯だった。「白いオープンカー（ジープ）でパパ様入場」。信者の声援に手を振りながら場内を一周して壇上中央に着席された。

各国謁見団の紹介が告げられると、帽子やネックチーフ等を振る団体・大声で歓喜を表す団体・唄を歌う団体等色とりどりだ。我々は「日の丸の小旗」を振って「Japan」に答えた（パパ様も会釈で答えてくれたように見えた）。挨拶のモニターテレビ（大型液晶）で気になるのは、「原稿を持つ左手がパーキンソン病のためブルブルと振っている」ことだった。

午後は、謁見の終わったサンピエトロ寺院広場を抜けて、旅の本命である25年に一度開かれた「聖なる扉」前の長い行列の最後尾に並んだ。カメラ撮影は禁止されている中、重厚に出来た青銅扉の彫刻（カトリック新聞の写真）は、普段閉じていても「多くの信者が手を触れた」のであろう、浮彫部分だけが光っている。順番が来て彫刻に触れた瞬間、「一生に一度の経験と、やっとここに来られた」と言う感動が沸き「殊勝な心」で扉を潜った。聖堂に入るとミケランジェロ24歳の作品「ピエタ像」が目に入る。イエス様とマリア様像の大きさが大分違う（イエス様が小さい）事と、マリア様の肩たすき（リボン）には、「作者ミケランジェロのサイン」が書かれていることを初めて知った。

続いて入ったバチカン美術館では、システリーナ礼拝堂の正面壁一杯に描かれた、「審判の絵」（約幅約13m・高さ20m）は素人の目で見ても、色合といい・人間の表情・人々の動作どれを見ても素晴らしく感動的だった。「何時までも見て居たい心境」だったが、時間が来てしまい「後ろ髪を引かれる」思いで美術館を後にした。



翌日、2番目の聖なる扉の「城外聖パウロ教会」に向う。外門を入るとパウロの大きな銅像が迎えてくれた。庭園を抜けた聖堂正面右側の「聖なる扉」は、行列も無く簡単に潜ることが出来た。中に入った正面奥のベネデクト聖堂でミサが行われ、マツゴワン神父様の説教は「我々は聖なる扉は入ることも出来るし、扉を閉じることも出来る。しかし、車椅子の人は手助けが必要であり、信仰の神と共に手助けすることを、大聖年の誓いとしよう。」と優しく話された。

午後は第三の聖なる扉を潜るため「ラテラーノ教会」（バチカン宮殿の建設以前に歴代の教皇様が住んでおられた所）を訪問。「聖なる扉」は質素で彫刻も無い「ただの木板製扉」だ。前の二つとは違い「何か重厚感が無い」（失礼）。聖堂内には、「ペトロとパウロの頭蓋骨」、左側壁には金箔「最後の晩餐彫刻」（机の一部には実際に最後の晩餐で使われた物が、内装されている）がある。教会広場前道路を挟んで、「クリストサルバリ聖なる階段（ご受難の階段＝イエス様が跪き登られた28段の階段）」が有る。私達も跪いて登った。階段は木製で簡単に見えたが、自分の体重が膝を圧迫し磨り減った階段角が抵抗する。「膝の痛さを堪えて」踏破した。

翌日は最後の「サンタマリア・マジョーレ教会」だ、土曜日の午後で教会前広場は、大勢の人で混雑していたが、「聖なる扉」には行列も無い。（内心、私共は日本人だから行列が無いと興味も薄れる）そんな思いのまま「聖なる扉」を潜り聖堂に入る。この教会は別名「雪の日の奇跡聖母マリア教会」（マリア様に「雪の降る日に、丘に教会を建てれば子供を授ける」との天の声によって建てられた）。地下には「イエス様誕生の飼馬桶の一部」があり、これを見ようと信者が後を立たない。

今回の旅で四つの「聖なる扉」を潜った（下の写真は四つの聖なる扉の証明証）が、「何と言ってもサンピエトロ寺院が良かった」。次回の25年先は「まず無理だろう」、そんな意味からも今回の「大聖年の旅」は将来とも心に残り、長旅が出来た「健康」と合わせ「神に感謝」。

※写真は「4つの扉を潜った証明書」。下段の4枚の写真は、左からサンピエトロ宮殿・ラテラーノ教会・サンタマリアマジョーレ教会・城外聖パウロ教会。



【追記】

2001年5月ゴールデンウィークに、東京国際展示場（ビックサイト）で開催された「イタリア祭り」に行き、聖なる扉の開閉時にヨハネ・パウロ二世教皇様がお召しになった、「祭服」「ビビアーノ（ガウン）」「祭帽」「杖」等をガラス越しではありましたが、真近に見てきました。

祭服・ガウンは、紫色・赤色・金色の縞模様で美しい光沢であり、祭帽は白色を基調に金色の縁取りで気品がある「素晴らしい物でした」。じっと見ていると半年前の「サンピエトロ宮殿扉潜り」が思い出されました。

ガストロ喪失記（その4）

失いしものへの挽歌

竹内 広治

平成9年の春遅い頃、惰眠を寝呆けた顔が、思わず引き攣る胃ガンの宣告。青天の霹靂とは正にこのことである。間もなく、追われる心地で手術を受け、30日あまりの入院生活となる。そろそろ飽いたと感じた頃待望の退院を許される。やれ嬉しやと雀躍りしたのも束の間で、前述した通り病院からの警告まじりの注意を、疎かにした報いともいえる、まさかの腸閉塞発症。これは開腹手術の後によく起こる後遺症とかで、当然のこと再手術を受ける羽目となってしまった。またぞろ30日に及ぶ入院生活延長戦である。退屈な日々が続くうち、少しづつ面白いことに気がつき始め、病院暮らしのノウハウも板につき、病室の次期牢名主の候補に挙げられる寸前、退院の期日を告げられる。

その後は自宅でマイペースの療養を続け、ひたすら体力の回復に努めるのだが、なかなか思うように進まない。しかしここが辛抱のしどころと、我ながら天晴れな根性で頑張った甲斐あってか、少しづつ体調が上向いて来たようだ。この調子でいけば、クリスマスやお正月は家庭でゆっくり楽しめると期待し、年甲斐もなく胸膨らむ思いでいっぱいであったが…。

平成9年の悪夢は、冬の到来と共にさりげなくやってきた。待降節に入ったある日、風邪を引いたか寒気がしてならない。市販の薬を飲み早めに就寝したのだが、けだるい微熱がうつつと絶え間なく続き、こころなしか脚の力が抜けてゆくのが気に懸かる。ある朝から痰が喉に絡みはじめ、次第に呼吸が苦しくなってきた。食欲はすでに無くなり、辛うじて飲めた水さえもついに受けつけない有様となり、慌てて病院に担ぎこまれ、急性肺炎と診断されてそのまま入院。ついに平成9年、3回目の入院生活を余儀なくされた次第である。

医師の説明によると、2度に渉る大手術の結果、体力の消耗、免疫力や抵抗力の著しい低下が病状悪化の進行に拍車をかけたとの由。年末年始の楽しい計画もすべてオジャン。空しい夢と消え果てた1年のうち3ヵ月を、病院のベッドの上で過ごさねばならなかった平成9年は、私にとって悪夢の年。文字通り平成（苦）年であった訳。これらの忌まわしい記憶は早く忘れてしまいたいものだ。

今年平成13年。胃や脾臓の摘出手術から4年目を数える。幸いその後の経過は順調で、体調すこぶるよろしく、毎日のご機嫌の連続である。この様な状態の時よく人に問われること、「代わりの胃は出来上がりましたか」「？」……胃の摘出後の処置について、誤解や過ちが喧伝されている様だ。胃を摘出した後、大方の場合、食道に引き上げた小腸を縫合し、食道と腸を直結する方法が一般的だ。私も同じで、主治医はそれをエスカレーターと名付けている。胃の代わりの通路がやがて胃の機能を備えた器官に転化するなぞ有りえないこと、トカゲの尻尾の如き内臓の再生話は、あくまで希望的な幻想に過ぎないのだ。療養中一番苦労したのが食事。食品目、量、そして食習慣など全ての見直しから始まった。食べたものを消化するのは消化液。今は胃が無い。従って胃液が出ない。代わりに唾液を使わねばと、嚙んで嚙んで嚙み尽くして唾液を送り出す。従って食事はゆっくり時間をかけて行ない、食道の奥に貯めておく。食べたものが大分柔らかくなったら、エスカレーターで腸に行く。そこには腸液はじめ胆汁、胆汁など消化液軍団が待機しており、本格的な消化と吸収が始まるのだ。これでひとまず安心と言う処だが、ここに至る迄の道程は、一朝一夕の平坦なものでなく、試行錯誤を幾度も繰り返した結果そのものである。



間もなく5月、開腹記念日が近い。体調が順調なのは嬉しい限りだが、生身の体である限り時には不調の日もあって、それが抑制する力となって、好調つづきの悪乗り暴走にブレーキの効果を利かせているのかも。具合が悪いといえば、胃を摘出したため前後のオートドア（噴門、幽門）が無くなり、口から腸まで一直線。時々腸内の雑音が、ある時は高くある時は低く共鳴し、喧しい事この上もない。食事の際、気づかぬ内に空気が食べ物と一緒に腸に送られる。気密性を失った為、尾籠な話で恐縮なれど、ガスの大量発生に悩みは尽きず、バス旅行などのお誘いは丁重にお断わりする次第。

さて、本日も晴天。青空が広がっている。散歩のコースは何処にしようか。健康だった頃に近づいた様な朝を迎え気分は最高。考えもつかぬ大病を3度続け、死線をさまよったのが嘘の様な気がする。生かされている喜びを、実感として捉えられた事を改めて感謝致したい。2000年の大聖年に信仰心の浮薄を悔恨し、新世紀に臨んではより多くの人々と交わりを重ね、語らいの中に語り部として生き、人生の余白に何かを書き残すことが出来たらこれ以上の喜びはない。

ああ、労りを忘れた荒びの日々を耐え、ガン細胞を懐深く抱いて漏らさず、何もいわず一筋の煙りとなって天空高く消えてしまった、愛しいガストロに心から哀別の歌を捧げよう。ありがとう。